

平成 23（2011）年度セタシジミ種苗放流結果と生息状況

石崎大介・幡野真隆

1. 目的

南湖はかつてセタシジミ漁業が盛んであったが、砂地の減少や水草の繁茂などにより現在ではほとんどセタシジミ漁業が行われていない。そこで、県では湖底耕耘や覆砂による漁場の再生を行っており、あわせてセタシジミの D 型仔貝の種苗放流を実施している。放流効果を検証するため生息状況を調査した。

2. 方法

橋本・井戸本（1996）の方法にしたがい、琵琶湖北湖で採捕した親貝を用いて、D 型仔貝を生産した。生産個体は 2011 年 5 月 25 日から 8 月 5 日に順次、船上からホースと鉄管を用いて水深約 3 m に放流した。放流場所は南湖の南北耕耘区（各 60ha）、H22 年度覆砂区（5.8ha）である（図 1）。なお 2009 年は耕耘



図1 セタシジミの種苗放流地点と調査地点

区に約 10 億個体、H20 年度覆砂区に約 1 億個体、2010 年は耕耘区に約 10.1 億個体、H21 年度覆砂区に約 1 億個体、また南北各耕耘区の南部には 2006 年から放流が行われている。

各放流地点と H20、H21 年度覆砂区において 2012 年 3 月 6 日にエクマンバージ採泥器により稚貝の生息状況を、2 月 13 日に噴流式小型定量桁網（以下：桁網）により 18 mm 以上のシジミの生息状況を調査した。エクマンバージで採捕（各点 3 回採捕）した個体は目合い 250、710、1000、2000 μ m の篩にかけた後、底質から選別して計数し、桁網で採捕した個体は殻長を計測して生息密度を求めた。

3. 結果

北耕耘区、南耕耘区、H22 年度覆砂区にそれぞれ約 5.2 億、5.2 億、1.1 億個体を放流した。耕耘区には種苗を 3 ヶ所に、覆砂区は岸側と沖側に等分して放流した。エクマンバージによる調査では北耕耘区南部、覆砂区で殻長 0.35～1 mm（篩の目合いから計算した殻長）のシジミが高い密度で生息していた（図 2）。

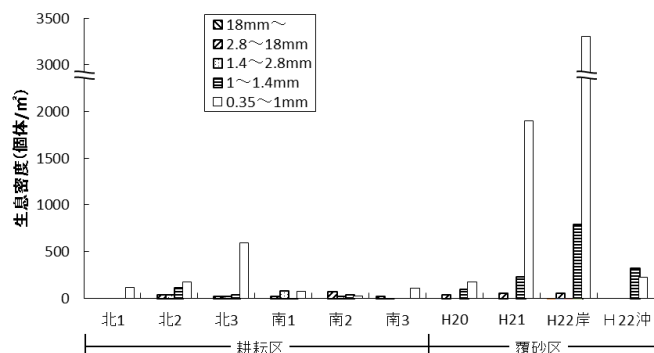


図2 シジミの生息密度(エクマンバージによる採捕)

北耕耘区と覆砂区で多い傾向は昨年と同様であり、覆砂が稚貝の生息環境改善に貢献していることを示唆している。しかし、昨年は H20 年度覆砂区では生息密度が高かったが、本調査では減少した。これは調査時に湖底表面に泥が堆積しているのを確認しており、生息環境が悪化したことが原因と思われる。桁網による調査では南耕耘区の南部で 11 個体/ m^2 という高い密度で 18 mm 以上のシジミが生息していた（図 3）。ほとんどの地点で昨年よりも生息密度が増加しており、漁業の再開が期待される。

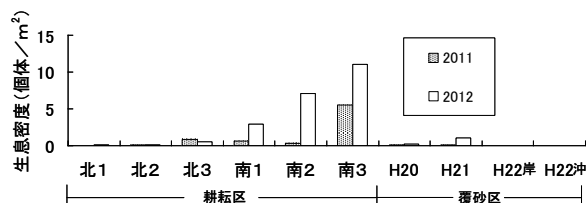


図3 18mm以上のシジミの生息密度